

聖書：コリント人への手紙第一 9：1～12

説教題：すべてのことを耐え忍んで

日時：2022年7月24日（朝拝）

8章1節から「偶像に献げた肉」についての話が始まっています。特に今見ている部分で問題にされているのは、偶像の宮で偶像に献げた肉を食べることです。当時の異教社会では、そのような場所で様々な市民的集まりが開催されましたので、偶像礼拝と決別したクリスチャンたちにとっては大きな問題でした。そんな中、コリント教会で「私たちはみな知識を持っている」と主張する人々は、その肉を食べることを問題ないとししました。彼らが主張する知識とは、8章4節にあった通り、神はただお一人であって世の偶像の神は実際にはないものであるというものです。偶像の神は存在しないのだから、それに献げた肉を食べても何の影響もない。むしろこの知識に立って恐れずそれらを食すべきであると主張していました。一方、他の人々はそれは良くないと考えました。せつかく異教の神への礼拝生活から抜け出たのに、また偶像の宮へ行って異教の儀式に参加することは偶像礼拝に逆戻りすることではないのかと。こういう考え方の相違がある中で、「我々はみな知識を持っている」と主張する人々は強い態度に出ていたようです。彼らは他の人々が見ている前であえて偶像の宮で食事するという行動を取っていました。そして「知識を持つクリスチャンはこのようにするのだ！これが成長したクリスチャンのやり方だ！」とこれ見よがしに示すようなことをしていました。これを見て、どう判断したら良いのか分からない人たち、8章で「良心が弱い」と言われた人々は、その食事会に加わるようになります。でも心の中ではやはりこれは偶像礼拝ではないのかと感じるのです。これは神に従っていないことではないかと。そしてついにはつまずき、滅びにさえ至ってしまいかねない。果たして「私たちはみな知識を持っている」と主張する人たちの知識は本当に正しいのか、そのまま是認できるのか否かについては後に10章で述べられます。その前にパウロはまず、知識を誇る人たちの力づくの態度は正しくないということを語って行きます。

パウロのスタンスが前回最後の8章13節に記されていました。彼はそこで、もし食物が私の兄弟をつまずかせるのなら、私は今後決して肉を食べませんと言いました。偶像の宮で食べないどころか、肉一切を食べないと彼は言いました。もしそれが兄弟をつまずかせるのならと。ここにパウロは自分は何をして良いか、自分にどんな自由があるかよりも、その私の行動は他の兄弟姉妹にどんな影響を与えるか、それは他の

人々をつまずかせないか、それは他の人を建て上げることに繋がるか。そういう観点から判断して生きるべきであるという原則を示しています。

パウロは9章で自分の証しを続けます。8章13節では今後これこれの場合はこうしません！という将来についての言葉でしたが、彼はすでにこの原則に則った生き方をしていました。まず1節で彼はこう言います。「私には自由がないのですか。私は使徒ではないのですか。私は私たちの主イエスを見なかったのですか。あなたがたは、主にあって私の働きの実ではありませんか。」 一見ここでパウロの使徒性が問題になっているようにも思われますが、この後の内容を見て行くとそこに強調点はないようです。むしろパウロが使徒として当然受けて良い権利に焦点が当てられています。ですからその話の出発点として、パウロは自らが使徒であることをもう一度確認しているということでしょう。少し強い言い方がここでされていますが、ある人は、コリント教会のある人たちが自分の権利を主張するために用いていた言い方をパウロはパロディのようにして用いて表現しているのだろーと言っています。パウロは言います「私には自由がないのですか？」 もちろん自由があります。彼はクリスチャンとは今やキリストにあって真の自由を与えられた人であると語って来た人です。その彼にももちろん自由はあります。また「私は使徒ではないのですか？」 もちろん使徒です。「私は私たちの主イエスを見なかったのですか？」 もちろん見ました。使徒の条件の一つは主を直接見た人であることです。パウロはダマスコ途上で復活の主にお会いしました。そのことは後の15章でも触れられます。また「あなたがたは、主にあって私の働きの実ではないのですか？」 もちろんパウロの働きの実です。2節でパウロは「たとえ私がほかの人々に対しては使徒でなくても、少なくともあなたがたに対しては使徒です。」と言います。これはパウロがコリント教会の設立者であったことを指しています。他の教会はそうでなくても、あなたがたは主にあって私の働きの実であり、そこに私が使徒として立てられ、主に用いられた証拠があると彼は言います。

こうしてパウロが使徒であることを確認した後、パウロは話を進めます。まず4節：「私たちには食べたり飲んだりする権利がないのですか。」 これはどういう意味でしょうか。文字通り食べたり飲んだりする権利がない人はいません。これは4～6節が1セットであることを考慮するとその意味が見えて来ます。つまりこれは教会に支えられて飲み食いする権利のことです。あなたがたのサポートによって、その生活を支えられる権利は私たちにないのですかという意味です。5節も同じです。他の使徒

たちや主の兄弟、ケファは信者である妻を連れて歩いていました。これはその伝道活動・伝道旅行において家族も一緒だったという意味です。ですからその家族の生活費も教会がサポートしていました。同伴し、共に生活する妻あるいはその家族も支えられていたということです。とするなら単身で仕えているパウロは当然サポートを受ける権利があるのではないのかということです。

6節ははっきりとそのことを語っています。「生活のために働かなくてもよい」とは、教会に支えてもらう権利のことです。他の人々はそれを受けていたようですがパウロとバルナバはそうでなかったようです。それは私たちにはその権利がないからなのですかとパウロは問います。

続く7節では、働く者はその働きから糧を得るのが通常のことであるということが日常生活の3つの例から示されます。一つ目は兵士です。自分の費用で兵役に服す人はいません。当然その働きに従事する人のためには、その糧も支給されます。2つ目はぶどう園を造る人です。その人は自分の畑から実を取って食べます。3つ目は羊飼いです。果たして羊飼いは群れを飼いながら、その乳を飲まないのか。チーズを食べてはいけないのか。当然そのようにします。パウロはこのようなことを言うのは人間の考えによるのかと問います。そして律法も同じことを言っているとして9節で申命記25章4節の御言葉を引用します。モーセの律法には「脱穀をしている牛に口籠をはめてはならない」と書いてあると。そして言います。9節後半から10節前半：「はたして神は、牛のことを気にかけておられるのでしょうか。私たちのために言っておられるのではありませんか。そうです。私たちのために書かれているのです。」初めてここを読む人はびっくりするかもしれません。なぜ牛について言われていることが人間に当てはまるのかと。しかし引用元の申命記25章4節を良く見ると、この意味が分かって来ます。その前後関係を見ると、すべて人間のことについて語っていることが分かります。24章14～15節では労働者の賃金はその日の内に支払うべきであると言われていました。続く16節はある人が罪を犯したら、その人だけがさばかれるべきであって、その家族まで死刑にされてはならないと言われていました。続く17～18節は寄留者や孤児、やもめの権利のことです。そして19～22節はそのような弱い立場にある人々のため、畑を全部刈り取ってはならないこと、残ったものは残したままにすべきことが言われています。そして25章に入って1～3節はさばきが実行される時、憐みも一緒に考えられるべきこと、そして引用元の4節を挟んで5～10節では息

子がなくて夫を亡くしたやもめに関する規定が記されています。このような流れを見ると、25章4節で突然牛に関する規定が入っていることには誰でも違和感を覚えるのではないのでしょうか。ですから牛のことが語られているようですが、——それは実際に牛に当てはめられるべきことと言えますが、——それは人間に適用すべき原則として最初から言われていることを示唆します。ではこれはどういう意味なのでしょう。昔、脱穀は麦を地面に敷いて牛に踏ませ、もみ殻と実を分離し、その全体を空中に放り投げてもみ殻を吹き飛ばすことによって実を集めました。その際、牛の口に口籠をはめて麦を少し食べさせないような無慈悲なことはするなということです。働いている牛に、働いている間、そこから食べるくらい許してやれという規定です。つまり働くだけ働かせて、何も与えないというようなことをしてはいけません。働いている人には、その働きから糧が得られるようにせよということです。ですからパウロは10節後半でこう言います。「なぜなら、耕す者が望みを持って耕し、脱穀する者が分配を受ける望みを持って仕事をするのは、当然だからです。」従って使徒たちもそのように、その働きからサポートを受ける権利は当然あるのです。

11節に「私たちがあなたがたに御霊のものを蒔いたのなら、あなたがたから物質的なものを刈り取ることは、行き過ぎでしょうか」と続きます。同じ原則はローマ人への手紙15章27節、ガラテヤ人への手紙6章6節にも述べられています。12節前半を見ると、ほかの人々はその権利にあずかっていたようです。「ほかの人々」とはこの時、コリント教会で奉仕していた働き人たちのことかもしれません。それは正しい状態です。主の御言葉にかなっている状態です。

しかしパウロの力点は、だからあなたがたは私をサポートしなさいということではありませんでした。パウロたちは、この権利を用いなかったと12節後半に語られます。それはその権利がないからではありません。これまで見て来た通り、当然その権利はあります。しかしその権利をパウロたちは行使しませんでした。なぜでしょう。それは「キリストの福音に対し何の妨げにもならないように」するためです。これはこの権利を行使すると、福音に対して妨げとなることがあり得たということです。それはどんな妨げなのでしょう。具体的にはここに書いてありませんが、パウロの他の手紙からいくらか想像できます。それは一つには利益目当てで宣教活動をしていると見られないためでしょう。当時のギリシャ世界には金銭目当てで各地を巡回する偽預言者や宗教家が多数いたようです。そのような人々と同じように金儲けのための活動

と批判され、福音の妨げとならないようにということです。あるいは新しい宣教地で信仰に入ったばかりの人に負担とならないようにということもあったかもしれません。設立後間もない状態で経済的力が十分でない教会に過大な負担を強いないように、特に信仰に入ろうとする人々の妨げとならないようにということがあったかもしれません。パウロはそのためにその権利を用いなかったと言っています。これは彼が教会からのサポートを決して受けなかったということではありません。他の教会からは支援を受けたことがいくつかの箇所に記されています。しかしコリントではこの権利を彼は行使しなかった。それはその方が福音にとって妨げがなくなると判断しかたからです。

しかしこの権利を放棄したがゆえに、パウロたちが自分たちに強い犠牲は大きなものでした。福音を宣教しつつ生活のための働きもしなければなりません。それは現実には厳しかったことが 12 節最後の「すべてのことを耐え忍ぶ」という言葉に示されています。第二コリント 11 章 9 節には、コリント滞在時にパウロは「困窮していた」とか「欠乏」状態にあったと記されています。しかしパウロはここで文句を言ったり、苦々しい言葉を吐いているわけではありません。あるいは自己憐憫に陥っていたのでもありません。この「耐え忍ぶ」という言葉は、後の 13 章、愛の章に出て来ます。13 章 7 節に、愛は「すべてを耐え、すべてを信じ、すべてを望み、すべてを忍びます」とあります。ですからこれは愛の行為だったのです。他者を愛するからこそ、他者の益を図るからこそ、パウロたちは耐え忍んでいた。これは知識を誇るコリント人たちが決してしようとは思わなかったことでした。彼らの考えはこういうものでした。なぜ私は耐え忍ばなければならないか。なぜ私は私の権利を用いてはならないのか。私には権利がある。自由がある。資格がある。他の人がどうあれ、私は私のこの権利を行使して生きる。そうして結果的に周りの人々、特に弱い人々を滅ぼすようなことをしていました。しかしパウロは反対の道を進んでいました。それは他者を愛して耐え忍ぶという生活です。そのために自分の権利を用いないという生活です。兄弟姉妹の益のため、あるいはこれから救われる人々のため、また福音のため、どうすることが一番良いかを考え、その下で自分に自由があっても、権利があっても、喜んで放棄し、周りの人々の祝福と成長のために仕える。そういう生き方があるということです。こういう自由の発揮の仕方があるということです。

そしてこれは言うまでもなくイエス様が私たちに示してくださった生き方でしょ

う。イエス様はご自分のことだけを考えれば栄光の天の御座から降りて来る必要はなかったのに、私たちの救いを心にかけて、愛により耐え忍ぶ生活をしてくださいました。ご自分の権利を用いず、それらを私たちの救いという一大目的のもとにしまい込み、ご自身を低め、その尊い命までささげてくださいました。そのキリストを仰ぎ、そのキリストに感謝し、そのキリストに従っているパウロの姿がここに 있습니다。後にパウロは、この部分のまとめとなる 11 章 1 節でこう言います。「私がキリストに倣う者であるように、あなたがたも私に倣う者でありなさい。」 パウロは確かにキリストに倣っていたのです。そしてそのパウロの姿を見て、私たちもキリストに倣う歩みへ進むようにとされています。

果たして私たちの日々の歩みはどうでしょうか。私のして良いこと、私の自由に属すること、私の権利、……。それぞれ色々あるでしょう。しかしそれを行使する結果、他の誰かにつまずきを与えるかもしれない場合、私たちはどうするのでしょうか。いやそれでもこれは私の権利であると言って、そのまま進むのでしょうか。人のことで左右されたくはない。私は私のして良いことをするという路線を進むのでしょうか。そうして他の人々をつまずかせても気に留めず、自分中心の道を進むのでしょうか。あるいは自分個人として、して良いことであつたとしても、それは周りの人々どういふ影響を与えるか、それは福音の前進につながるのか、周りの人々を建て上げることににつながるのか。そういう関心を上に持って来て、そのためには自らの権利と自由を喜んで放棄する、あるいは後回しにするという生き方をする者でしょうか。もし後者の道を行くなら、その人こそイエス様に倣って歩む人です。その人はその歩みを通してイエス様に対する心からの感謝を表すことができます。またイエス様の足跡を踏み行くことを通して、イエス様の愛の大きさを益々深く味わい知る恵みに生かされ、また他の方々が建て上げられるために用いられるという神の前に最も価値のある人生をささげる者へと導かれて行くことになるのです。